
雪の日のお話

ゆきんこ2008

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の日のお話

【Nコード】

N5904D

【作者名】

ゆきんこ2008

【あらすじ】

ある日、山の上で熊に食べられそうなところを人間の人に助けられた雪の精が、恋をする物語です。

1 話目

山の上で茶色い陰と出会つと要注意です。

その陰が大きいと、

爪や牙を持つている可能性があります。

それどころか、目が合うと口を開きます。

すごい勢いで襲い掛かってきます。

雪の精は、一生懸命に目をつむると、肩をすくめて自分の身におこつた悲劇を忘れようとしていました。けれど、そうできないこともあるものですぐに自分がただ今、熊に襲われたことに気づいたけれど、

ふと、自分の傍にあった陰がさっきの茶色くて大きな影ではなく、なんだかまるで人間のようにシュツとした素敵な人のような気がしたのです。

おそろおそろ目を開くと、それはとても素敵な人間の人でした。

彼は、雪の精が熊に食べられそうになっているのを見つけて、助けてくれたようでした。

彼は、そつと去つてゆきました。

雪の精はその背中を見送ると、言葉もなく胸に手をおいていたのです。。。

いくら万物の霊長と言われる人間の中でも、

こんなに大きな熊と戦って勝てるすごい人間なんて、なかなかいません。

狩りとなると、人間は銃等を持つのだといいます、けれど、彼は何も持つてはいなかったのです。

雪の精はあつという間に、彼の虜になってしまいました・・・。

昨晩は、とても冷えしました。

どれ位、冷えたのかというと、綺麗に咲いていた筈の花さえも、一夜に凍えてしまうほどでした。

そんな中でも、いかんせん、自分は雪の精：

雪よりも冷たく、そしてその夜を凍えさせたのもまた自分でした。

それでも希望をもってこうしてここに在るだけで と、

山を彷徨っていた矢先に、熊に食べられる所だったのです。

雪の精は色んな混乱はしていたけれど、

もうともかく、彼の虜でした。

ここは、人の気配も多いスキー場です。

きつと、さっきの彼もスキーに来ていたのでしょう、

大方、リフトに高くまで昇りすぎて少し道を逸れて一山迷ってしまつたに違いないのです・・・すぐに追い駆ければ、きつとまだあの人はいてくれるのです。

雪の精は必死でした。

いつもだったら、人や物を探す時には、雪達に聴いてみるのです。そうじゃなければ、神様や天使達にお祈りをするのです。

けれども、それどころじゃないくらい彼女は必死でした。

一生懸命に山を降りて、さっきの彼を捜しに行ったのです。

ぜひ、もう一度会いたいです。
どうしても、もう一度会いたいです。

2 話 目

雪の精には人知れぬ孤独がありました。

雪の精は山上で生まれた筈でした。

雪ならば空から降って来ます。

しかし、雪の精は決してそうではありませんでした。
気がつけば山の中で眠っていたのです。

もしも、目覚めが早ければ、彼女はひとりきりではなかったかもしれません。

けれど、朝に弱いお寝坊さんの雪の精は、
ただど夜も凍える中で暗く怖く、
昼間にうろろと起き出してきては、こうして困っていたのでした。

ボーツとしている彼女には気づかないのです。
あらゆることに・・現実には彼女には漠然としすぎていたし、
どこか物悲しいのでした。

けれど、彼に夢中でした。

ひっそりになって追い駆ける途中に、吹雪に吞まれそうになっても
追い駆けつづけました。

いる筈もないような所まで、分かっているのにひっそりになって探
しました。

そして、ついにスキー場でみつめた彼を見つけて、雪の精は言葉を
なくすのです。

彼はよく見るとなんて素敵なのでしょう。

彼をとりまく光さえも キラキラと輝いているかのようにです。
きつとさっきの彼に間違いはありません。

雪の精は駆け寄ろうとしましたが、

その前に大きな犬のジョンがさつと横切ったのです。

雪の精は少しだけ後ずさりしました。さっき熊に襲われただけに、動物がちよつと怖いのです。－けれど、ジョンはどうも彼の飼い犬のようで、雪の精はそんな光景を、少し離れた場所から見ていました。

彼はそつとそんな彼女に気づくと、

けれどもこのジョンを散歩につれてゆかなければいけないので、
穏やかな足取りで去って行ったのです。

雪の精は、息も止まるようなおもいで、彼の後を追い駆けていきました。

3 話 目

スキー場は冷えます。

雪の精でも寒いぐらいです。

雪の精は彼が冷えていないか心配なあまり、いっしょうけんめいにお祈りを始めました。

雪の精には彼に近づける勇気が出せません。

もしも、激しい追い風が吹けば、どさくさにまぎれて出て行けるかもしれないけれど、今はまだ遠くからそつと見守ることしかできないのです。

けれども、そんな雪の精は、ふいに虫取り網で背後からつかまっています・・・

雪の精はびっくりしました。

どうして今、自分が虫取り網でつかまったのか分りません。

そこにはキツネさんがいました。

キツネさんにとって雪の精はどうも可愛らしく見えたようなのです。

キツネさんは言いました。

「僕は、ずっと雪の精を捜していたんだよ。満月の夜に結婚しましょう。」

けれども、その様子をちょっと気になって見ていた彼は、わって入ると、お話をしました。

「雪の精と結婚をするキツネなんて聞いたこともないから、やめてください。」

雪の精は振り向くと、そんな彼の姿に見入っていました・・・。

神様、私は多くのものを望んでないよ。

どうか、彼と仲良くなれますように・・・。

そんな彼女の想いが神様に届いたのか、

雪の精は、力一杯の勇気を出して彼にお名前を聴きました。

「私はっキラキラです。仲良くしてくださいっ」

雪の精は、もちろんヒトと接したことがあります。

「ん？キラキラ？」 - 彼もけげんに思いましたが、

「私は雪の精でキラキラという名前なんです！」

雪の精、キラキラは精一杯そう言いました。

そうしてめでたく彼と知り合えたのです。

4 話 目

キラキラは、キツネさんとも仲良くなっていました。

この冬の季節、みかんはとても美味しいですし、お餅を焼いても最高です。キツネさんがお家に招待してくれて、キラキラと一緒にくつろいでいました。

「こたつがあるから冬でも寒くないよねー。」

キツネさんはそう言います。

コタツというものに初めて足を入れたキラキラは、ずっと血の気の引くのを感じましたが、それはすぐにゆるぎない温もりへと変わりました。

こんなにあやわらかな思いをしたことがないキラキラは、キツネさんの頬にキスをする、「いつまでも一緒にいてね。」と、友情を誓いました。

そして、みかんを食べながら小屋をでると、彼が今日はいないかと外に出たのです・・・

彼は、ルンルンさんという名前でした。

よくこの辺りを犬の散歩にくるのです。

けれど、キラキラには、ルンルンさんが一体どんなひとなのか、よく分らずにいたのでした・・・だって、よく考えたら熊を倒せる人間なんてやっぱり普通じゃなかったのです。

それでもキラキラは多くのものは望みませんでした。

今日も、一目でもルンルンさんの姿が見られればそれでよかったのです・・・

それに今はもう独りぼっちではなく、

キラキラにはキツネさんがいます。

そうしてキツネさんはこう言うのです。

「二人の絆が消えることのないように、指きりをしよう・・・。」
と、小指を差し出すと、

二人はなかくなり笑い合いました。

ルンルンさんにとってはキラキラは気になる感じでしたが、
それでも、ルンルンさんはひよっとしたら人間じゃないのかもしれないかも
しれません。

ジョンに犬だということに間違いはありませんが。

そんな日に、ハプニングは起きました。

前にやってきた熊が、バーンと小屋のドアを押し壊してやってきた
のです。

「このあいだはよくもにげたな！もう怒ったぞ」と、言いながら・

キラキラはキツネさんとぎゅっと抱き合つと、
怯えて身を縮めていたのです。

けれども、ふと停電で電気が消え、恐ろしい声があちこちに響い
たかと思つたら、熊はいなくなっていました。

胸の中にいたキツネさんは、

「キツネはただの動物じゃないんだヨ。熊やねずみと一緒にしな
いでおくれ。色んな神秘的な力があるのだから、変身することだつ
てお手のものさ。」

そう言つと、ふわっと美しい人へと変身したのです。

「さあ、これ以上もう、ここは安全ではありません。

一緒に人間の世界へとゆきましょう。」

と。

5 話目

「人間の世界には一体、何があるの？」

キラキラは、キツネさんに聞きました。

美しい人に姿を変えたキツネさんは、きれいな狐色のやわらかい金髪の、白いチャイナドレスを着たとても素敵な人でした。

キツネさんはキツネの手をすると、こう言いました。

「いろんなモノがあるんだけどさー、まあ、・・おいなりさん。おいなりさんね。」

キラキラも、キツネの手をまねしたけれど、まねしきれずに、こう訊きました。

「おいなりさんって何？」

そうすると、キツネさんは耳をピクつとすると、

少し目を輝かせてキラキラに丁寧に話し始めました。

それは、まるで辞書をひいたかのように、またそれよりも丁寧な説明でした。

こたわりがあるキツネさんなのです。

「人間の世界・・。」

実は、キラキラも人間のことをあまり良く知ってはいないので。今まで、ボーツと山上で暮らしていただけなので、

「ひょっとしたら何か素敵なものが見つかるかもしれない・・。」

キラキラは考えました。

あのとつても素敵なルンルンさんに素敵なものがあるかもしれない。せん。

それを、見つけて、そして、あげるのです。

「人間の世界に行こう。」 - キラキラはキツネさんの手を取りま

した。

そうして二人は、人間の世界に行って見ることに決めたのです。

ところがその晩は、小屋の前でワンワンと犬が鳴く声が聴こえていました。

まるで、あたかも、悪事を止めようとしているかのようにでした・・。

人間の世界は温かいのです。雪の精のキラキラが行くと、溶けちゃいます。その犬はきつとそれを心配してくれたのです・・

けれども、キツネさんは、「ううん、キツネに不可能はないんだよ。森のファントムと呼ばれたさ。」と、かつこよく言うと、本当にまるでファントムのような動きでキラキラの手を引き、山を降りて行ったのです・・。

ルンルンさんは遠くの方からむっとしてその様子を見ていました。限りなく大怪我もしていました。

・ そうなのです、

本当は、ルンルンさんことが、あの熊だったのです！

6 話 目

お山には、ウサギさんもいました。
とっても可愛い白いウサギさんです。

「雪の精ちゃんったら今日も元気ね!」と、
愛らしく寄って来ると、

一緒にいたリスさんも、「そういえば今日はどこにいくの?」と、
聴きました。

動物達はしらないのです。

キラキラがこのキツネさんといっしょに人間の世界へ行ってしまう
うことを、

そのことを話すと、二匹はショックを受けてしまいました。

「キラキラちゃんと遊べないなんて寂しいよ。」

「でも、人間の世界でもなにかいいことあるといいね。」 - 優しいウサギさんとリスさんなのです。「早く帰ってきてね。むしろ、私も行くよ。」

そんなわきあいあいとしたやりとりを、熊さんは木の陰から見ていました。

熊は、あの日、やっとキラキラをみつけたのです。

それが、キツネさんと仲良くなってしまったのです。

熊は、キラキラ達の後を追いつけると、人間の世界につづいて行くことにしました。

ちよつとした遠足に仲間はずれの気持ちになりました。

（人間の世界なんて、悪いやつがいっぱいいるんだぞ・・・）
熊さんは、戸惑いと心配を隠しきれません。と、いうのも、一度
山に訪れた人間の中にこんな人間がいることを知っているのです。

靴のかかとを踏んで歩いているのです。

人間の中には、たちの悪い者もいるのです。

ときには、食べていたチューインガムをそのまま山に捨てていた
りもしました。

熊には、そんな人達がどうしても許せないのです。

（そんな人間に、あの子がつかまったら大変だ・・・）ルンルン
さんは身を案じて心配すると、シュっとした人間に変身をしてつい
てゆきました。（人間はそんなに大らかないい人ばかりじゃないん
だよ。今に、泣くことになるゾ。）と。

けれども、どうもキツネさんと並んで歩くキラキラはニコニコし
ていて、

可愛いウサギさんやリスさん達とも仲良しです。

（・・・可愛いものチーム？）

ルンルンさんは、少しだけ孤独も感じました。軽く小石を蹴りま
した。

けれど、そんな山も大体降りたところに、
鬼とバツタリ会ってしまったのです。昨日、節分だったので、そ
の帰りだったみたいですね。

鬼は赤く、目は怖く丸く大きく、
キラキラは泣いてしまいました。
キツネさんは勇敢に見ていました。

山は危険な場所です 時に、鬼さんが帰ってくるのです。
けれどもルンルンさんは、パッと現れると、鬼からキラキラを守
ってくれたのでした。

7 話 目

まー！と、キラキラは驚いていました。

ルンルンさんがいて、そして守っていてくれているのです。

キラキラは感動を隠し切れずに、

けれどもルンルンさんの顔を見ることもできずに、少しだけ頭を下げてルンルンさんにくつついていました。

「鬼と戦って勝つなんてすごいね。」・ウサギさんも仰天です！

「ふん。」ルンルンさんはそう言つと、

ポケットに入れておいた豆を捨てました。

ただ単に山に捨てたものではありません、

白い小鳥たちが食べるんです。

「人間の世界になんて行くもんじゃないゾ。」

ルンルンさんはそう言いました。

「人間の世界が一番いいんだよ。」・キツネさんはそう言い返しました。「この娘も、興味を持っているし」

おいなりさんがあるからです。

キツネにとっては人間の世界もそう悪くはないけれど、

熊にとっては違います。

すぐに人にびっくりされるからです。

だけど、ウサギさんもしゅるりと美しい人間に変身すると、

「私達はどっちでもいいわ。」と、言いました。

キラキラは、ずっとルンルンさんにぺっとりとくつついていました
たが

勿論ルンルンさんが熊だということは知りません。

けれど、ひょっとしたら人間じゃないのかもしれないかも
「...」キラキラは判断に困っていました。

キツネさんはキラキラの手を引くと、けれどもルンルンさんはむ
っとしました。

「冷静に話そう」

真面目かつクールに、ルンルンさんはそう言いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5904d/>

雪の日のお話

2011年1月14日13時36分発行